

グローバル人材に必要な能力を育む試み

—ウクライナ問題から学ぶ—

A Practice for Fostering the Competence of Global Human Resources: Lessons from the Ukraine Crisis

久 世 恭 子

1. はじめに
2. 研究の背景
 - (1) グローバル人材と必要な能力
 - (2) 大学のウクライナ支援
3. 研究方法
 - (1) 対象授業と参加者
 - (2) 調査と分析の方法
 - (3) 倫理的配慮
4. 学習者の姿勢と反応
 - (1) ウクライナ大統領と駐日大使の講演会に対する反応
 - (2) 留学生サポートに関するインタビュー調査
5. おわりに

1. はじめに

本論では、大学英語授業で取り入れたウクライナ問題や留学生のサポートに対する学習者の反応を分析し、グローバル人材に必要な能力を育む上での意味を考察する。2022年にロシアによるウクライナ侵攻が起これ、日本でも公的機関や民間団体による支援活動が開始された。戦時下にある人々の役に立てるように支援を行うことが喫緊の課題である一方、教育現場ではこの状況から何が学べるのか、児童、生徒、学生は何を学ぶべきかについて模索が続いている。

英語教育では、グローバル人材育成という言葉が登場して久しいが、当初から「グローバル人材」という言葉の持つ曖昧さが指摘されている。特に、グローバル人材に必要な能力や要素はどのようなものなのか、十分な議論がなされないまま、時には英語能力のみがその要素として注目されてきた。しかし、英語以外の能力、例えば、「異なる状況にいる他者を理解する」という力などもグローバル人材に必要な能力の1つになるのではないだろうか。その場合、現在のような国際情勢の下では、ウクライナの状態を知って理解し、自分自身で考え、必要なサポートを自発的にすることもグローバル人材に必要な能力に通じるはずである。時間的、内容的に制限のある大学英語授業において、たとえ授業のごく一部であってもこうした活動を取り入れ、学生たちがグローバル人材になるための足掛かりを作ることは可能であると考えられる。

本論では、こうした取り組みを学生の反応と共に紹介する。英語授業で取り上げたウクライナの講演会への出席や留学生へのサポートを通して学生たちは何を学び、どのように反応したか、を研究課題としたい。

2. 研究の背景

まず、グローバル人材と必要な能力について先行研究を示しながら議論し、次に研究対象とした大学のウクライナ支援について説明する。

(1) グローバル人材と必要な能力

「グローバル人材育成」という概念が近年の日本の英語教育改革の根底にあることは言うまでもない⁽¹⁾。例えば、小学校英語の教科化や大学入学試験における外部民間試験導入の検討などもこれを目指したものである。グローバル人材育成のために英語教育を強化するということが自体は当然のことであると考えられるが、一方で「グローバル人材」の定義やそのために必要な能力については曖昧なままにされてきたという指摘もあり、英語能力の向上こそがグローバル人材育成に直結するとの解釈には疑問が呈されている（松本, 2015; 鳥飼, 2016）。

では、グローバル人材に必要な能力とは何であろうか。久世（2019; 2022a）では、アジア地域に赴任した日系企業の若手社員に実施したインタビュー調査をもとに、ベースラインとしての英語力は不可欠であるもののグローバル人材に必要な能力や要素は他にもたくさんあり単純化して考えるべきではないと結論付けた。さらに、世界各地で働く若手駐在員 43 名にアンケート調査をした久世（2022b）は、彼（女）らにとってグローバル人材の姿は「理解」「柔軟」「寛容」などの言葉で表すことができ、「異なる文化や世界の多様性を理解し、相手に柔軟性や寛容性を持って接した上できちんとコミュニケーションが取れる人」（p. 29）であることを示した。また、大学改革支援・学位授与機構（2017）は、英語力強化＝グローバル人材の育成とはならないと明言し、「グローバル人材にもとめられる能力は、①自分の国・地域について語れる、②自分の意見・意志を話し、他人に理解してもらえる、③他者を理解するの三つ」（p. 46）であり、「対話」（コミュニケーション能力）とそれを支える日本語を含む語学力が前提であるとする。鳥飼（2016）は、「グローバル人材」を地球社会に貢献する「グローバル市民」と言い換えた上で、その条件を「自らの『アイデンティティ』をしっかりと持っていること」「『異質性に寛容』であること」「ことばを通して他者と関係構築ができること」「『教養人』であり、かつ『専門性』を持っていること」と述べている⁽²⁾。

英語教員が日々の授業の中でこれらの能力向上に貢献できることがあるとすれば、英語能力を伸ばしつつ、「異なる背景や状況を持つ他者を理解する」「世界の中の多様性を理解する」「ことばを通して他者と関係構築ができる」などの目標を達成するための活動を、たとえ単発的にでも取り入れていくことである。語学能力を発展させるのと同時に、受講生が少しでも日本国外の事情に目を向け、異なる背景、文化、状況を持つ他者について学ぶ機会を得られるようにすれば、将来にわたって世界に関心を持ち続けられるグローバル人材、あるいはグローバル市

民が育つかもされない。日々の授業では、このような活動を意識的に取り入れ、学習者にモチベーションやきっかけを与えることが重要となる。

(2) 大学のウクライナ支援

研究対象とした大学では、ロシアのウクライナ侵攻が勃発した 2022 年 2 月以降、ウクライナの 3 大学と学術交流協定を締結し、大学生・研究員等の受け入れなど様々な支援活動に継続的に取り組んでいる。中でも 4 月 12 日に開催された「セルギー・コルスンスキー駐日ウクライナ特命全権大使による特別講演会」と 7 月 4 日に開催された「ウオロディミル・ゼレンスキーウクライナ大統領によるオンライン特別講演会」は、当該大学の学生や教職員にとってウクライナの現状を知る重要な機会となっただけでなく、学外でもマスコミにより大きく取り上げられた。前者の駐日ウクライナ特命全権大使による特別講演会は、「ウクライナコサックの民の歴史と文化」というタイトルが示すように写真をふんだんに盛り込んでウクライナの歴史・文化・自然等について紹介し、日本との文化的、地政学的共通点も挙げたものである。また、後者のゼレンスキーウクライナ大統領による特別講演会では、オンラインによるご講演とはいえ、戦時下にある国の大統領から戦争と平和について直接お話を伺うことができ、講演後には日本人学生と留学生からの多くの質問に丁寧に答え、有意義な質疑応答の時間を提供してくれて参加者にとり貴重な機会となった。

3. 研究方法

始めに本論の調査で研究の対象とした授業と対象者について説明し、調査と分析の方法を述べた上で、倫理的配慮について記す。

(1) 対象授業と対象者

本論では、2022 年春学期に開講された、英語を教室言語としてグローバル・ビジネスについて学ぶ選択科目の 2 授業を分析対象とする。それぞれの授業では同一の教科書を使用し、Zara, Amazon, Sony のようなグローバル企業が抱える課題とその解決について学んでいるが、両授業では取り上げる箇所や内容は異なっている。2022 年春学期は対象授業を提供する大学がウクライナへの支援を開始した直後に始まり、学内で特別講演会などのイベントが開催されていたことから、それぞれのコースで以下のような活動を取り入れた。活動を行った日付をカッコ内に示す。

授業 A: The Ukraine crisis and business というタイトルでレポートを提出 (4/12)
ゼレンスキーウクライナ大統領に特別講演会への出席 (7/4)

授業 B: コルスンスキー駐日ウクライナ特命全権大使による特別講演への出席 (4/12)

授業 A で行った「The Ukraine crisis and business」は、このタイトルに関する新聞記事などのニュースを履修生各自が見つけて読み、要点を 80 語程度の英

語にまとめてオンラインで提出をする課題である。翌週の授業でグループ・プレゼンテーションを行い、他の学生とニュースを共有した。履修登録の完了前だったため履修生全員が行ったわけではないが、ウクライナ危機が世界に与える影響についてビジネスという視点から考えてもらうきっかけとなった。「ゼレンスキーウクライナ大統領に特別講演会への出席」は、対面、同期型オンライン、非同期型オンラインのいずれの方法でも参加が可能であったので、履修生は全員参加するようにコメントを提出してもらった。この講演会は大統領自らの希望により実現したということで大変熱のこもった講演となった。大統領は主に戦争と平和についてお話しされ、参加者は講演の内容はもちろんのこと、学生との質疑応答のやり取りからも多くを学ぶこととなった。

授業 B の「セルギー・コルスンスキー駐日ウクライナ特命全権大使による特別講演会」は、「ウクライナ コサックの民の歴史と文化」というタイトルに沿って、写真を多く使用され、ウクライナの歴史、文化、自然、さらにウクライナと日本との共通点について学ぶ機会を与えてくださった。こちらも、対面、同期型オンライン、非同期型オンラインのいずれの方法でも参加が可能であったので、履修予定者全員に参加してコメントを提出してもらうこととした。

さらに、授業 A には 5 月 23 日の授業からウクライナからの留学生が出席した。筆者も授業担当者として、教材を供与したりそれまでの授業の内容について個別に説明したりしたが、教室では、ほとんど日本語が話せずまだ日本の大学のシステムに慣れていない留学生のために、数人の日本人学生がサポート役を務めてくれた。

2 つの授業の履修生はほぼ全員が経営学部にも所属し、1 年生から 4 年生までが登録している。留学生も数名ずつ履修しており、出身国は中国、台湾、香港、韓国、ベトナムなどアジア圏が中心である。英語能力は履修の目安として TOEIC スコアで授業 A が 500-600、授業 B が 400-500 とシラバスに記載しているが、あくまで履修生の自己申告であり、実際にはこのレンジより高いスコアを持つ履修生も多い。

(2) 調査と分析の方法

授業 A, B のそれぞれで、ウクライナ大統領と駐日大使の講演会に出席してコメントを英語または日本で書いて提出することを課題とし、そのコメントをテキスト化して分析対象とした。一旦、KH Coder⁽³⁾でテキスト・データの中の頻出語を抽出し、その語を含む文やフレーズを書き出してから、それぞれの頻出語を含む数個のコードを作成した。次にテキスト・データを再び読み各コードの内容に近い文やフレーズの数を数えた。

インタビュー調査は、授業 A でウクライナからの留学生をサポートする機会が多かった受講生複数名に研究参加の依頼をし、そのうち 1 人が応じてくれたことから、春学期の全授業と試験が終了した後実施した⁽⁴⁾。インタビューは semi-structured (半構造化) 方式⁽⁵⁾を用いて約 30 分間行い、インタビュー記録は、主に谷・山本 (2010) と坂本 (2022) を参考にコーディングの手法を用いて分析し

た。まず、IC レコーダーに録音したインタビューを書き起こして逐語録（インタビュー記録）を作成し、そのテキストを意味のかたまりに従って切片化した。次に、各切片にコードを付して、そのコードに基づき切片をカテゴリーに分類した。

(3) 倫理的配慮

本論の研究は、受講生のコメントの分析とインタビュー調査の2つに分かれるが、研究計画は十分に練り、研究対象者に対して研究内容と研究結果の公開方法を十分に説明した。また、両研究共に、特定の個人を識別することができないように既に匿名化されたデータのみを使用した。講演に対するコメントのデータ収集においては、学習支援システムに提出されたすべてのコメントをエクセル・ファイルで集計してからコメントの部分のみワード・ファイルに書き出した。その後で、元のエクセル・ファイルは削除しコメントが個人情報と結び付かないようにした。インタビュー調査については、研究対象者が強制されて研究に協力するおそれはないよう細心の注意を払った。事前に研究内容と研究結果の公開方法を十分に説明して協力してもらえたことになったのだが、さらにインタビューの直前にも同意書を用いて再び説明をし、同意を再確認してからサインをしてもらった。同意書には、「IC レコーダーで録音し逐語録を作成して分析すること」「参加するかどうかはご自身で決定し途中で参加を辞めることもできること」「成果は論文としてまとめ、学部の論文集などに投稿する予定であること」「論文や発表では、名前や大学名の情報は個人が特定できない表記にすること」などが明記されている。

4. 学習者の姿勢と反応

ここでは、活動に対する履修生の姿勢や反応を探るために、「ウクライナ大統領と駐日大使の講演会に対する反応」と「留学生サポートに関するインタビュー調査」の結果を示し、考察していく。

(1) ウクライナ大統領と駐日大使の講演会に対する反応

① ウクライナ大統領の講演に対して

表1 ウクライナ大統領の講演を聞いて

コメント	n=27
平和への願いや平和の尊さを感じた	19 (70.4%)
学ぶことの大切さに気付いた	12 (44.4%)
大統領の強さ、リーダーシップに感銘を受けた	7 (25.9%)
戦争の恐ろしさを実感した	7 (25.9%)
支援することの重要性を感じた	5 (18.5%)
支援する大学の学生であることに誇りを感じた	2 (7.4%)

表1は、7月4日のゼレンスキーウクライナ大統領による特別講演会に対して、出席者のコメントを分析したものである。27人中16人が日本語で11人が英語でコメントを書き、期限までに提出した。英語のコメントは筆者が日本語に直してコーディングを行った。

講演出席者のコメントで目立ったのは、半数以上の回答に見られた「平和への願いや平和の尊さを感じた」であるが、これは、大統領が講演の中で「現在の日本のような平和な状況は戦時下の国から見れば奇跡のようなものである」と述べられたことを受けて、「当たり前だと思っていた普通の生活が実は当たり前のものでなかったと気付かされた」という出席者の回答も含んでいる。2番目に回答が多かった「学ぶことの大切さに気付いた」については、「今起きている世界情勢についてしっかり向き合いたい」「戦争の終結を望む気持ちはもちろんあるが、ロシア側の事情についても学びたい」「母国再建のために世界の各地で学んでいるウクライナ留学生のことを考え、自分も勉学に励みたい」「この講演で当事者意識が湧き、いかなる世代も政治や国際時事に関心を持つこと、理解を深め自分の意見を持つことが大事であると感じた」「ウクライナ留学生から文化や実際の状況等話を聞きたい」と学ぶ対象や内容はそれぞれ異なるが、出席者たちはこの講演をきっかけにウクライナ侵攻や世界情勢への関心を高め、自分自身で考え学びたいと思うようになったことがわかる。

② 駐日大使の講演に対して

授業Bでは、4月12日に開催されたウクライナの駐日大使の講演会に対面またはオンラインで参加し、コメントを英語または日本語で書いてもらった。37名中11名が日本語で、16名が英語でコメントを書き、それらを分析したものが表2である。

表2 駐日大使の講演を聞いて

コメント	n=37
戦争に対する恐怖、怒りを感じた	26 (70.3%)
ウクライナの文化、歴史、自然を学んだ	20 (54.1%)
日本との共通点を学んだ	20 (54.1%)
支援への関心を持った	17 (45.9%)
自分で考えることが重要であると感じた	3 (8.1%)

「戦争に対する恐怖、怒りを感じた」という回答が多いのはある程度予測がついたが、ウクライナと日本の架け橋という任務を背負っている駐日大使の講演ということもあり、「ウクライナの文化、歴史、自然を学んだ」「日本との共通点を学んだ」というコメントが目立った。「自分で考えることが重要であると感じた」というコメントは少数ではあったが、それぞれ丁寧な説明を施してくれた。「時にはフェイクニュースも混じる戦争に関する情報に対して自分のものさしを持ち判断することも大事だ」という意見もあり、「高校で世界史を学んだ身として、何のた

めに国際連合や強国の特権があるのか」という疑問を投げかける学生もいた。また、ベトナムからの留学生は、日本人学生とは異なる視点を持ち、かつては自国を守ってくれたロシアがこのような侵略をしていることに大きな失望を感じていると自分の立場から回答した。

(2) 留学生サポートに関するインタビュー調査

ウクライナからの留学生をサポートした学生へのインタビューは、コーディングの結果、「機会を活かす」「不安を自信に変えていく」「英語能力の向上を実感する」「今後の活動につなげる」の4つのカテゴリーを設けた。カテゴリー別に発話を分析していく。発話引用には特にコーディングのためのテーマが強く現れている箇所に下線を施した。

① 機会を活かす

インタビューの始めの部分では、もともと英会話に関心を持っていた日本人学生（以下、Cさん）がウクライナからの留学生（以下、Dさん）が自分と同じ授業に参加していることを知り、その学生と英語で話したいという強い気持ちを持ったことが語られる。これまでの英語学習は学校の授業が中心で、海外に1回も行ったこともないCさんにとって、留学生に話しかけるのは容易なことではなかったようであるが、それでもこの機会を捉えて最初の一步を踏み出した。

【1】

元々、このクラスに入った時から結構、海外の人とか留学生の方が多いのかなっていうのは何となく感じてたんですけど、私はすごく英語をしゃべってみたいみたいな気持ちが強く、私、海外に行ったことが1回もないんです。でも英語を話せるようになりたいというか、英語話せれば格好いいなっていうのがあって。（下線は筆者による。以下、同様）

【2】

英会話教室みたいなやつに1年間参加してて、今まではずっと学校の勉強だけだったんです。ちゃんとしゃべれるようになりたいって言って1年やってみて、自分の力どれぐらい伝わるのかなみたいなのもあったし、結構、好奇心とか興味が大きいほうなので。Dさんが来た時に、ほんとはすぐにでも声掛けたかったんですけど、勇気が出なくて。

② 不安を自信に変えていく

Dさんに思い切って声をかけてみて、その後は他の授業の課題を手伝ってあげたことで急速に親しくなったということであった。それにつれ、Dさんとの関係や自分の行動にも少しずつ自信が持てるようになっていったようである。

Cさんが感じた不安には少なくとも2つの要素があると推察される。1つは、面識もなく性格もわからない留学生に突然話しかけて相手はどう思うだろう、押しつけがましいのではないかと思う不安で、もう1つは、自分の英語能力で意思疎通ができるだろうかという不安である。日本でのみ教育を受けてきた人ならば当然持つであろうこれらの不安を、Cさんは徐々に克服した。相手の状況を考え

て十分な配慮をしながら、少しずつ D さんとの距離を縮めていったことがわかる。この機会を活かすべく勇気を出して声をかけることは重要であるが、やはり、このような特殊な状況であればなおのこと、相手を思いやりながら時間をかけて関係を築いていくことが大切になってくるのである。英語に関して不安を感じるのも当然であるが、次の③でも詳説するように D さんとのやり取りの中で次第に自信をつけていった。

【3】

メッセージとかのやりとりも何回かしたりとかして、何か困ったことがあったら声掛けてみたいに言ったら... (中略) ...協力してほしいっていうのをメッセージで頂いて。それを友達に送って集めてっていうのを結構やったりしてる中で、どんどん仲良くなったりしたり... (中略) ...D さんが待ってくれたりとか。教室に入る前に、ベンチで私のこと待っていて、会って「やほー、待ってたよ」みたいな感じで。そこから一緒に教室に向かったりとかなるようになって、1回2人でランチしたことがあって、そこでかなりしゃべりました。

【4】

最初は、私も自分の英語伝わるかなとか、すごい不安だったんですけど、お互いが第2言語、B さんも英語はファーストじゃないし、私も日本語ベースで英語なんか全然しゃべれないって感じだったので。何か力になれば、最悪、翻訳とか頼れることもいっぱいあるから、とにかく話しかけてみようみたいな。

【5】

向こうがすごくそんなに感謝してくれる。私的には全然、よくあるアンケート協力してなんてよくあることなんで。でも、そういう D さんに何か力になったのかなっていうのは、私もうれしかったし。それからかなり仲良くなった気はします。

③ 英語能力の向上を実感する

D さんと親しくなるにつれて、英語でコミュニケーションをすることにもますます興味を覚えるようになる。そして徐々に自信を持てるようになり、自分自身で英語能力が向上していることを実感するようになった。上記の引用【4】にある「お互いが第2言語（として英語を話す」と認識することは重要で、海外で行われる実際の英語コミュニケーションでは話者の一方か両方が英語母語話者でないことも多いことから、私たちは普段からそうした状況にも備えるべきである。

また、C さんが D さんのサポートを始めてまもなく英語能力の向上を自覚するようになったのは、やはり、高校時代から英語学習に興味を持ち、1年間英会話プログラムにも参加して準備をしてきたことにもよると考えられる。逆に、そのような基礎力がない場合には、短時間の実践で大きく英語能力が向上することを期待するのは難しいと思われる。

【6】

私も英語、全然 D さんのほうができるし、それを向こうが理解してくれようっていう姿勢

見せてくれるから、私も前向きになれるんですけど。やっぱり私も全然 100%しゃべれるわけじゃないので、不安とかあるんですけど、一緒に笑い合ったりとか、フィーリングじゃないんですけど気が合うこととかもあったりするとうれしいし。それは D さんも同じなのかなって感じる瞬間も多いので、それは私には少し自信になります。私の今の英語でもしゃべれるんだなっていうのが。

【7】

しゃべれた、しゃべれる機会、だから私にとってその月曜日に D さんと会って、その時間はほぼ英語に。逆に申し訳ないぐらい私が D さんからいっぱい力を得たじゃないですけど、それはすごい感じてますし。 本当に一番、私の大きな出来事でした。D さんと出会ったことは本当に。リスニング伸びました。めっちゃ伸びました。

土台となる基礎的な英語力を持った上で、次の引用【8】で「聞いて理解しないと会話は始まらない」と述べているように、英語能力は相互のやり取りの中で向上する。そして、英語を使うコンテキストも休み時間や昼休みとグローバル・ビジネスについて学ぶ授業中というように、日常と専門的な場面の両方において実践を積むことが重要なのである。そうして、徐々に英語が話せるようになると少しずつ自信がつき、【8】の最後に見られるように「さらに英語をしゃべりたい」という気持ちになるのである。

【8】

でもやっぱり聞いて理解しないと会話は始まらないので、そこは自分が話す英語が言葉足らずでも、そういう単語とか流れとかであと推測とかで、D さんが理解してくれることもあるんですけど。私が D さんが言ってることも会話できてるってことは理解できてることかなってことだし、それも終わってから、その時は話すことに一生懸命だから聞いて答えてを自分のできる、自分が持っている能力でやろうって一生懸命やってるんですけど、終わってから、聞き取れてるし。自分の日常的なたわいもない話とかもするし、授業になると結構、記事について専門的な話もするようになってたじゃないですか。その時の意見もすごいいい意見だと思うとか、D さんが言ってくれたりとかする時もあったりして、それは私の自信とか実感につながりましたし。さらに英語をしゃべりたいみたいな気持ちに本当になりました。

【9】

本当に動機付けになって、これからいろいろしゃべるんですけど、かなり変わって、ほんとに。ほんとに変わって。授業の中ではそういう感じで D さんとは話すことが私にとって英語の力を身に付けられる。自分の力を発揮できる時間みたいな、ちょっと特別な時間になってました。

④ 今後の活動につなげる

C さんのように、クラスメートとしてウクライナからの留学生をサポートして日本人以外の方と英語で話すことの喜びに開眼したとしても、授業中に実践できる時間には限りがあるし、学期が終了すれば授業も終わってしまう。そこで、C

さんが【9】で「動機付け」という言葉を用いたように、授業中に得た「英語を話したい」という気持ちや「英語で話ができる」という自信を次に続けることが重要となる。それができるかどうかで、将来グローバルな場で活躍できる人材になれるかどうかも変わってくるだろう。幸い、Cさんの場合には、【10】が示す通り、自発的に国際交流の場に参加して新たな友人を作ろうとしているようである。

【10】

海外に語学留学とか、語学研修とかそういう感じで行きたいのは絶対思ってた。あとは、実際に日本の中で国際交流っていうのは結構あると思うんですけど、それに今まではずっと気になってたんですけど、ずっと勇気がなくて相談してたんですけど参加したことなかったんです。こんだけしゃべれたし、Dさんも分かってくれたし。

5. おわりに

本論では、大学英語授業で、グローバル人材に必要な能力を育むことを念頭に置いて行った取り組みを紹介し、講演会でウクライナ問題を知ることや留学生へのサポートを通して学生たちは何を学び、どのように反応したかを考察した。

ウクライナ大統領や駐日大使の特別講演に出席してコメントを提出する活動では、これまで当たり前だと思っていた日常の生活が実は奇跡のような恵まれたものであること、そして遠い国の話だと思っていた侵略や戦争が現実のものであると実感したという率直な感想が寄せられた。講演者のおかげで、改めて戦争と平和について深く考え、ウクライナの文化や歴史を学ぶことができたことは学生にとって「異なる状況にいる他者を理解する」という点で大きな学びとなったが、それに加えて、自分で情報を収集し考えていくことの重要性を再認識したという声が多かった。参加者にとって貴重な体験となったことがわかる。

また、ウクライナからの留学生をサポートした履修生へのインタビューからは、不安な気持ちを抱きながらも最初に声をかけて助けになろうとしてから、徐々に留学生と良い関係を築き、英語でのコミュニケーションにもある程度自信を持つようになっていった過程が読み取れる。そのような過程を辿るためには、留学生と交流したい、あるいは留学生を支援したいという気持ち、授業やイベントなどのきっかけ、基礎となる英語能力を身に付けておくことなどのことが本人にとって必要であるが、教員の側でも動機付けとなるような刺激を与え、国際交流などを後押しすること、さらに授業終了後も履修生がグローバルな事情に関心を持ち、英語を話したいという気持ちを持ち続けられるようにすることなどが大切である。

日々、ウクライナの現状を伝えるニュースは心痛を伴うもので、それを教育や研究に使うには慎重になるべきであるが、まず、その国に関心を持ち、状況を知ることや理解することは重要である。そうして、異なる状況にいる他者を理解しつつ自分で考えていく姿勢を身に付けることがグローバル人材、グローバル市民となる第一歩である。さらに、少し勇気を出して機会を逃さず、サポートが必要な人を支援し、英語でコミュニケーションすることの不安を自信に変えていく

ことも私たちが今できることの 1 つである。ウクライナ問題について共に学び、支援の気持ちを持った履修生たちが、将来、グローバルな広い視野を持った人材に育っていくことを願うばかりである。

- (1) 斎藤 (2016) は、「昨今の英語教育では、一時の『コミュニケーション』に代わって『グローバル』がキーワードになりつつあ(る)」(p. 63) と指摘する。
- (2) ヨーロッパで言語教育政策を牽引してきた Michael Byram 博士が「相互文化的市民性」(Intercultural citizenship) (Byram, 2008) という言葉を用いているのと近似性がある。
- (3) KH Coder は、テキスト型 (文章型) データを統計的に分析するためのフリーソフトウエアで、「計量テキスト分析」または「テキストマイニング」と呼ばれる方法に対応している (樋口, 2020)。
- (4) インタビュー調査の具体的な実施方法について参考にしたのは、主に、Kvale (2007)、Schwandt (2007)、Seidman (2019) である。
- (5) この方式では、事前に用意した質問に沿って答えてもらいつつ、それ以外のことについても自由に話をしてもらうことができる。

参考文献

- Byram, M. (2008). *From foreign language education to education for intercultural citizenship*. Multilingual Matters. (細井英雄 監修、山田悦子・古村由美子 訳 [2015].『相互文化的能力を育む外国語教育』大修館書店.)
- Creswell, J. W. (2003). *Research design: Qualitative, quantitative, and mixed methods approaches*. (2nd ed.). Sage.
- Kvale, S. (2007). *Doing interviews: SAGE qualitative research kit 2*. Sage. (能智正博・徳田治子 訳 [2016].『質的研究のための「インター・ビュー」』新曜社.)
- Schwandt, T. A. (2007). *Dictionary of qualitative inquiry*. The Sage Publications. (伊藤勇・徳川直人・内田健 監訳 [2009].『質的研究用語事典』北大路書房.)
- Seidman, I. (2019). *Interviewing as qualitative research* (5th ed.). Teachers College Press.
- 久世恭子 (2019). 「グローバル人材に必要な能力についての一考察—アジア地域若手駐在員へのインタビューから—」『経営論集』94 号, 57-68.
- 久世恭子 (2022a). 「アジア地域若手駐在員から見たグローバル人材に必要な能力: インタビュー調査の分析から」那須雅子・坂本南美・寺西雅之 著.『ナラティブ研究の実践と応用—現代社会への理解と貢献に向けて—』(pp. 82-101). 学術研究出版.
- 久世恭子 (2022b). 「『グローバル人材』に対する若手駐在員の意識調査」『国際ビジネスコミュニケーション学会研究年報』81 号, 21-30.
- 斎藤兆史 (2016). 「『グローバル時代』の大学英語教育」斎藤兆史・鳥飼玖美子・大津由紀雄・江利川春雄・野村昌司 著.『「グローバル人材育成」の英語教育

- を問う』(pp. 63-82). ひつじ書房.
- 坂本南美 (2022). 「教師のナラティブを読み解くことの意味—ALT の成長を辿って—」 那須雅子・坂本南美・寺西雅之 著. 『ナラティブ研究の実践と応用—現代社会への理解と貢献に向けて—』(pp. 11-30). 学術研究出版.
- 大学改革支援・学位授与機構 (2017). 『グローバル人材教育とその質保証: 高等教育機関の課題』. ぎょうせい.
- 谷富夫・山本努編著 (2010). 『よくわかる質的社会調査 プロセス編』ミネルヴァ書房.
- 鳥飼玖美子 (2016). 「グローバル人材からグローバル市民へ」 斎藤兆史・鳥飼玖美子・大津由紀雄・江利川春雄・野村昌司 著. 『「グローバル人材育成」の英語教育を問う』(pp. 39-62). ひつじ書房.
- 樋口耕一 (2020). 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』(第2版). ナカニシヤ出版.
- 松本佳穂子 (2015). 「グローバル人材に必要な能力とは?—企業の『英語化』政策をめぐって—」『文明』19. 45-52. 東海大学文明研究所.
- 松本佳穂子 (2016). 『「グローバル人材」に必要な能力の構成要素の探求—異文化間能力の必要性—』『言語研究と量的アプローチ』(pp. 45-60). 金星堂.